

国語科研究部

1 研究主題

「言葉による見方・考え方を働かせ、確かな資質・能力を身に付ける国語科学習の創造」

2 研究主題について

『小学校学習指導要領解説』（平成29年）総説において、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善に向けた授業改善を進める際に留意して取り組むことの一つとして次のように述べられている。

「深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等との学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。」

このように、見方・考え方は学びの深まりの鍵となり、見方・考え方を働かせながら資質・能力を身に付ける学習過程を充実させることが求められる。さらに、見方・考え方は学びの本質的な意義の中核をなし、学習と社会をつなぐものとされている。

国語科の目標の冒頭において「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とあるように、国語科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として「言葉による見方・考え方」を示している。

『小学校学習指導要領解説 国語編』の中で、「言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。」とし、「「言葉による見方・考え方」を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながる」と述べられている。

このように、言葉による見方・考え方を働かせることは言葉への自覚を高めることであり、資質・能力をよりよく身に付けることにつながることであり、言葉による見方・考え方を働かせることを生かして学習指導を創意工夫していくことが求められている。

本市では『横浜市立学校カリキュラム・マネジメント要領 国語編』（平成30年）において、次のように言葉による見方・考え方を働かせる例を挙げている。

言葉による見方・考え方を働かせている例

- ・言葉の意味を知り、状況に応じて使い分けて関連付けている。
- ・文章の書き方や使う言葉を吟味している。
- ・相手意識をもって話す言葉を選んでいる。
- ・分かりやすい語句に書き換えるなど言葉を取捨選択している。
- ・自分の意見をもつために、根拠を明確にして考えを書いている。
- ・他者との交流や相互評価を通して新たな自分の考えに気付いている。

本研究会では、昨年度まで「確かな言語能力を子どもが主体的に身に付ける国語科学習の創造」を研究主題とし、副主題に「主体的・対話的で、深い学びの実現に向けて」を加え、子どもの学びの過程の質を向上させ、主体的に確かな言語能力を身に付ける国語科学習の創造を目指してきた。

今年度は、研究主題「言葉による見方・考え方を働かせ、確かな資質・能力を身に付ける国語科学習の創造」を設定し、本研究会で重視してきた確かな力の追究を継承し、「確かな言語能力」から「確かな資質・能力」を身に付けることを視点とする。「確かな資質・能力」とは、国語科において育成を目指す「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」につながる資質・能力ととらえる。研究主題に示す「国語科学習の創造」へ向かい、言葉による見方・考え方を働かせ、確かな資質・能力を身に付ける子どもの姿を具現化する実践を重ねて発信していく。

3 研究内容 【研究推進部】

「言葉による見方・考え方を働かせ、確かな資質・能力を身に付ける国語科学習の創造」
～深い学びに到達する「見方・考え方」を踏まえた単元づくりの在り方～

前述のように、新学習指導要領においては、言葉による見方・考え方を働かせることによって資質・能力をよりよく身に付けることにつながることで、また、言葉による見方・考え方を働かせる姿が表れるように学習指導を創意工夫していく必要があることが示されている。したがって、本研究会においても「言葉による見方・考え方を働かせ、確かな資質・能力を身に付ける子どもの姿」の具現化を目指す実践を重ねていく中で、どのような単元づくりや学習過程の工夫、手立ての工夫等によって、その姿が見られるようになるのかを明らかにしていくことを目指し、深い学びに到達する単元づくりの在り方を検証する。

そこで、言葉による見方・考え方を働かせる姿を具現化するための研究の視点を以下に示す。

① 単元計画の工夫

課題解決的な過程を踏まえ、相手意識・目的意識をもった言語活動の中で、どのように言葉による見方・考え方を働かせる姿が生まれていくかを見取り、系統立てて整理する。

② 「話す・聞く」「書く」「読む」それぞれの領域における、言葉による見方・考え方を働かせている姿の具体と系統化

言葉による見方・考え方を働かせている姿を領域ごとに整理し、共通点や相違点に着目することで系統を見出す。

③ 導入部、展開部、終末部それぞれにおける、見方・考え方を働かせる姿の具体と系統化

展開部については、領域や学習過程によって様々なパターンの見方・考え方を働かせている姿が表れる。導入部、終末部などは授業のねらい自体に共通性があると考え、具体と系統化を検討する。

④ 児童が見方・考え方を働かせている姿をメタ認知するための手立て

児童と教師が授業のめあてを共有することが、育成を目指す資質・能力を身に付けるために効果を発揮すると考え、児童自身が見方・考え方を働かせる姿をメタ認知し、振り返ることができるような手立てをとることで、授業の質の向上を図る。

⑤ 学習評価との関連性

子どもたちがどう学んだかを評価しようとするとき、特に思考・判断・表現力について評価するときには、子どもが何について、どのように思考して、どう表現したかを見取る必要がある。同時にどのように言葉による見方・考え方を働かせたことにより、資質・能力が身に付いたのか、あるいは身に付くまでには至らなかったのかを見取り授業改善に生かす。

⑥ 年間指導計画の工夫

学年に応じて目指すべき資質・能力を螺旋的・反復的に身に付けていくことを考え、見方・考え方を働かせている姿の初歩的な姿とより高次な姿を考える。より高次な姿にいたるには、どのような姿を経る必要があるのか明らかにする。

以上の検討事項について、一つ一つ明らかにして、系統立てて整理し授業改善を行う。まずは、昨年度までの実践で表れた言葉による見方・考え方を働かせている姿を整理した上で本年度実践を積み重ねる。言葉による見方・考え方を働かせている姿を明らかにして、それらが生まれた経緯を分析することから、研究主題にある国語科学習を創造する。

【授業改善部研究内容】

言葉による見方・考え方を働かせ、確かな資質・能力を身に付ける国語科学習の創造
 ～子ども自らが「問い」を見いだし、言葉による見方・考え方を働かせながら解決していく授業を目指して～

研究主題と研究推進部の研究内容及び研究の視点を受け、授業改善部においても、「言葉による見方・考え方を働かせ、確かな資質・能力を身に付ける子どもの姿」の具現化を目指す実践を重ねる。その際、区研等とも連携を図りながら、子ども自らが「問い」を見いだし、言葉による見方・考え方を働かせながら解決していく授業の蓄積と共有、有効だった指導の手立ての分析を行うものとする。具体的には、研究の視点①④⑤については、研究推進部と同様のものとし、視点②③⑥については、「言葉による見方・考え方を働かせる姿」の見取り・蓄積と、それらの姿を生むのに有効だった手立ての分析を中心に行い、具体の姿等について情報共有していくことで、研究推進部との連携を図っていく。

研究推進部の取組

<p>①単元計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉による見方・考え方を働かせる姿の（生まれ方の）見取り →系統立てた整理 手段（手立て）の例 課題解決的な学習過程の実現 相手意識・目的意識をもった言語活動 	<p>②「話す・聞く」「書く」「読む」それぞれの領域における見方・考え方を働かせる姿の具体と系統化</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉による見方・考え方を働かせる姿の領域ごとの整理→系統化 	<p>③導入部、展開部、終末部それぞれにおける見方・考え方を働かせる姿の具体と系統化</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉による見方・考え方を働かせる姿の学習過程ごとの整理→系統化 	<p>④子どもが見方・考え方を働かしている姿をメタ認知するための手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども自身が見方・考え方を働かせる姿をメタ認知し、振り返ることができるような手立て →授業の質の向上 手段（手立て）の例 子どもと教師の授業のめあての共有 	<p>⑤学習評価との関連性</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもが何について、どのように思考して、どう表現したかの見取り どのように言葉による見方・考え方を働かせたことにより、資質・能力が身に付いたのか、身に付くまでに至らなかったのかの見取り →授業改善 	<p>⑥年間指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 見方・考え方を働かしている姿の初歩的な姿と高次な姿の弁別 より高次な姿に至るためにどのような姿を経る必要があるのか明らかにする
---	--	---	--	---	---

研究の理論構築・授業実践

授業改善部の取組

<p>①単元計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉による見方・考え方を働かせる姿の（生まれ方の）見取り・蓄積、有効な手立ての分析 手段（手立て）の例 課題解決的な学習過程の実現 相手意識・目的意識をもった言語活動 	<p>②「話す・聞く」「書く」「読む」それぞれの領域における見方・考え方を働かせる姿の蓄積、有効な手立ての分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉による見方・考え方を働かせる姿の見取り・蓄積、それらの姿を生むのに有効だった手立ての分析 	<p>③導入部、展開部、終末部それぞれにおける見方・考え方を働かせる姿の蓄積、有効な手立ての分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉による見方・考え方を働かせる姿の見取り・蓄積、それらの姿を生むのに有効だった手立ての分析 	<p>④子どもが見方・考え方を働かしている姿をメタ認知するための手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども自身が見方・考え方を働かせる姿をメタ認知し、振り返ることができるような手立て →授業の質の向上 手段（手立て）の例 子どもと教師の授業のめあての共有 	<p>⑤学習評価との関連性</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもが何について、どのように思考して、どう表現したかの見取り どのように言葉による見方・考え方を働かせたことにより、資質・能力が身に付いたのか、身に付くまでに至らなかったのかの見取り →授業改善 	<p>⑥年間指導計画の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉による見方・考え方を働かせる姿の見取り・蓄積、有効な手立ての整理 授業実践・具体の姿の蓄積、有効な手立ての分析と情報提供
--	---	--	--	---	--

なお、研究のサブテーマに据えた「子ども自らが「問い」を見いだし、言葉による見方・考え方を働かせながら解決していく授業」を実現することは、すなわち、横浜市立学校における日々の学びの姿である「じっくり考え高め合い次につなげる確かな学び」の実現に他ならない。以下に示す内容を意識しつつ実践を行い、言葉による見方・考え方を働かしている子どもの姿の明確化と蓄積を行うとともに、それらの姿を生むのに有効だった手立てを明らかにしていくことで、確かな資質・能力を身に付ける国語科学習の在り方について考えていきたい。

授業づくりの際に意識したいことの例

<p>「じっくり考える」ために</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 考えていることは、「子どもが考えたいこと」か（<input type="checkbox"/> 考えていることが「子どもの問い」になっているか） <input type="checkbox"/> 考えていることは、課題解決（単元のゴール）に向かうものか <input type="checkbox"/> 考えるときに「見方・考え方」が働いているか（必須！） <input type="checkbox"/> 学習課題に照らして、必要に応じ、相手や目的を意識して考えているか <input type="checkbox"/> 考えるための手立ては講じられているか <input type="checkbox"/> 考えるための時間は保障されているか 他 	<p>「高め合う」ために</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 交流は子どもにとって必要感のあるものか <input type="checkbox"/> 交流の目的ははっきりしているか <input type="checkbox"/> 全ての子どもが参加しているか <input type="checkbox"/> 交流によって考えが広がったり深まったりしたか <input type="checkbox"/> 交流の手立ては講じられているか 他 	<p>「次につなげる」ために</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 見通しを立てたり振り返ったりする場面はあるか <input type="checkbox"/> 能力の系統は踏まられているか <input type="checkbox"/> 身に付いた力を子どもが自覚しているか <input type="checkbox"/> 身に付いた力を活用する場面はあるか <input type="checkbox"/> 未来社会につながる力を意識しているか 他
--	--	--

※上の表の三つの項目（「じっくり考える」ために、「高め合う」ために、「次につなげる」ために）は、それぞれを分けて捉えるのではなく、一体的に扱うものである。

4 年間活動（事業）報告

月	内 容	会 場
6月	役員会・部長会	浜小
7月	総会 授業改善部による「コロナ禍の中でのカリキュラムマネジメント」 研究推進部による年間指導計画の立案について	稲荷台小
9月	講演会「新学習指導要領の展開～横浜での実践の期待～」 鎌倉女子大学 児童学部児童学科 准教授 平井佳江先生	南公会堂
10月	校長によるミニ講座① 各部会研究 実践提案 授業力アップセミナー①	稲荷台小
11月	校長先生によるミニ講座② 各部会研究 実践提案 授業力アップセミナー② はまの国語 184号発行	稲荷台小
12月	講演会「指導と評価の一体化を図った国語科の授業づくり」 南部学校教育事務所指導主事 帯川理加先生 授業力アップセミナー③ 文集「よこはま」67号発行	花咲研修室
1月	各部会研究 Zoomによる校長によるミニ講座③ 実践提案 横浜市立学校総合文化祭 小学校児童書写展	稲荷台小・Zoom 市民ギャラリー
2月	Zoomによる第二次研究大会 研究発表 研究集録「いきいきはまの国語」発行	戸塚公会堂 Zoom
3月	役員・部長会	浜小

- (1) 横浜市立学校総合文化祭 小学校児童書写展（1月20日～24日）
感染症予防対策をしながら、5日間の会期で入場数が約1,800人あった。
- (2) 授業力アップセミナー
初任者および経験年数が短い教員を中心に、多くの教員が主体的に学び、国語科指導の基礎・基本を身に付けられるよう、指導主事と現任教員による講義や演習を計3回行った。
- (3) 文集「よこはま」
2,000点を超える作品の応募の中から、文集よこはま67号を発行した。今年度は、6学年の作品をまとめ1冊の構成とした。
- (4) 広報活動
「はまの国語」「いきいきはまの国語」の冊子、ホームページで各部の活動について紹介した。
- (5) 講演会
7月「新学習指導要領の展開～横浜での実践の期待～」(鎌倉女子大学 児童学部児童学科 准教授 平井佳江先生)・12月「指導と評価の一体化を図った国語科の授業づくり」(南部学校教育事務所指導主事 帯川理加先生)、多くの会員が熱心に講演を聞き、学ぶ姿が見られた。
- (6) 第二次教育研究大会
Zoomより研究推進部、授業改善部による提案を行った。実践事例を基に、子どもに資質・能力を育む言語活動を位置付けた実践提案を行った。文集「よこはま」の表彰式の代わりに、児童による作品の朗読を映像（音声）で披露した。

5 研究の成果と課題

年度当初、役員・部長を中心に研究・事業計画の変更点等を細やかに検討してスタートした。コロナ禍で例年のない配慮を要する中、初回7月の研究会は多数の会員の参加を得て、研究推進部より今年度の授業時数に応じたカリキュラムの編成や年間指導計画の立て方についての提案があり、各学校のカリキュラムの再編成の参考になった。2回の講演会をはじめ、授業力アップセミナー等も充実した学びの機会となった。ホームページを活用した情報発信もこまめに行った。

状況下、文集「よこはま」の編集と児童書写展について検討を重ね、児童や指導者の思いに応えようと可能な形で実施した。安全と効率を考慮して事業を実施できたことは、成果として挙げられる。

また、新たな試みとしてZoomを活用した実践提案や研究大会を行うことができた。来年度の活動においても、ズームなどICTの環境を整えることが課題として挙げられる。